



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第5回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

信じるという異端

前回は、セイヤーズの『ドグマこそドラマ』に、教理の大切さを教えてもらいました。今回はしかし、まったく反対のことを書くかと思えます。それは、つい先頃亡くなったウィルフレッド・キャントウエル・スミスという宗教学者の言葉です。

スミスは、第二次大戦前後にインド（現パキスタン）のラホールという町のキリスト教大学でイスラム史とインド史を教え、プリンストン大学で東洋語学を修め、後にハーヴァ

ード大学世界宗教研究所の所長をつとめた人です。イスラム研究や宗教間対話のさきがけとなった人で、長老派の牧師でもありました。

このスミス先生、ときどき突拍子もないことを言っておどろかされます。なかでもいちばん驚かされるのが、「信じるという異端」という標題の言葉です。彼によると、現代人はみなこの異端に毒されているため、誰もそのことに気づかないほどだ、と言っています。しかもそれは、宗教を信じている人だけでなく、宗教をもたない人も、宗教を疑ったり批判したりする人も、みな等しく陥っている考えだ、と言っています。いったいどういう異端なのでしょう。

注意してください。彼は、無信仰や無宗教を「異端」と非難しているわけではありません。むしろ逆に、「信じる」ことが異端だ、と言っているのです。そうは言っても、「異端」と言うからには、

信じるかどうかではなくて、「何を」信じるかが問題なのではないか——。誰もがそう問い返したくなるでしょう。実は、そういうわたしたちの考えこそが、まさに彼の言う異端なのです。

まずまず謎めいてきますね。スミスが言うのは、「宗教とは何かを信じていることだ」という考え自体が、近代に始まった一つの逸脱現象である、ということなのです。

何世紀にもわたって、信じるということは宗教的な人々の生にとって主要なことではなかった。ところが、人々は今日、宗教的であるということは何かを信じていることだ、と考えている。つまり、あれこれの教理命題に同意することだ、と考えている。これが、スミスの言う「信じるという異端」です。

ずいぶん大胆な主張ですが、スミスはそのために膨大な注をつけて論拠を示しています。そもそも、「信仰」という言葉は、「何かを信

現代人が「わたしは神を信じます」と言うのと、「えっ、あなたは神の存在を認めるのですか」という答えが返ってきます。

でも、そんな反応は、近代までは想像もつかなかったでしょう。

聖書の時代を含め、人々はこんなふうに答えてきたのだと思います。「そうですか、あなたは自分の人生をその神に委ねて生きることを決意したのですね」

「信じる」という意味では聖書にもコーランにも仏典にも出てこない(らしい)。あるのは、特定の信仰内容の知的な承認ではなく、ひたすらなる信頼の表明です。神や救い主についての教理ではなくて、人生の究極的な導き手に無条件の信頼を寄せること——それが「信仰」なのです。

現代人が「わたしは神を信じます」と言うのと、「えっ、あなたは神の存在を認めるのですか」という答えが返ってきます。つまり、信仰とは「神が存在する」という命題に同意することだ、という考え方です。でも、そんな反応は、近代まではほとんど想像もつかなかったことでしょう。聖書の時代を含めて、人々はきつとこんなふうに答えてきたのだと思います。「そうですか、あなたは自分の人

生をその神に委ねて生きることを決意したのですね」。

英語では、believe という動詞の後に、「it」を信頼して委ねる」という場合には「it」を使い、「it」という命題に同意する」という場合には that を使います。スミスは、聖書の中で大事だった「believe in」の信仰が、現代では「believe that」へと傾きすぎてしまったことを批判しているのです。

信仰には本来、さまざまな表現があります。儀礼や芸術、歌や踊り、人格や道徳、制度や習慣などは、いずれも日常生活における信仰表現の大切な一部でありました。

ところが、やがてその中で知性にかかわる表現が中心的な位置を占めるようになった時、「信仰」は、ある命題の集合への同意、とい

う意味になりました。それとともに、「宗教」も、人々の生活のあり方を離れて、「キリスト教」「ヒンドゥー教」「イスラム教」などと実体化された教理の体系を指す言葉になってしまったのです。

四世紀末にアウグスティヌスが『真の宗教』を書いた時、彼はそんなつもりでキリスト教を一つの「宗教」に数えていたわけではありません。しばしば題名から誤解されますが、この本は他宗教と比較してキリスト教こそ「真の宗教」だと言っているわけではありません。彼の言う「宗教」はむしろ、「敬虔」なしい「礼拝」と訳されるべき言葉で、そこで語られているのは、教理や儀礼の体系ではなく、一人一人がどのようにしたら真実に神と向き合えるか、という問題なのです。

もし宗教が一つの教理体系であるなら、そして信仰がそれへの同意であるなら、一つの宗教を信じることは、必然的に他の宗教を誤りとして拒否することにつながります。「信じる」という異端は、現代人の他宗教理解を妨げる大きな原因の一つになっているのです。セイヤーズの本はわたしも大好きなのですが、今日は彼女の時代から一步を踏み出し、聖書の真理に立ち返ってもらう一度強調しておきたいと思います。

信仰とは、教理への同意ではなく、神への信頼です。